

「イルカのねむり方」「ありの行列」(三上)

秋田大学教育文化学部附属小学校教諭 熊谷 尚くまがい たかし

「二教材構成」のよさを生かす

「イルカのねむり方」と「ありの行列」はともに、〈はじめ〉〈中〉〈おわり〉の三部構成で書かれており、文章構成や論理の流れが似通っている。〈はじめ〉では、これから説明しようとする事柄が「問い」の形で提示され、〈中〉では、その「問い」を追究した過程が詳細に説明されている。論理の筋道は次の通り。

- 観察や実験を通して分かったこと
- ← それに基づく仮説
- 仮説を検証するための観察や実験
- ← その結果明らかになったこと

そして〈おわり〉では、「問い」に対する「答え」が述べられる。

同様の文章構成と論理の流れを取っている二教材がセットになっていること、よさ。一つ目の教材での学習を土台にして二つ目の教材での学習を展開し、発展させることができる点にある。「何が」「どのように」書かれているかを読み取ることで、その文章を読んで自分なりの感想をもつことがこの単元の学習内容だが、特に前者の内容について二教材構成のメリットを生かしていきたい。

すなわち、「イルカのねむり方」で三部構成のそれぞれの部分の役割や科学的な論理に沿った文章の書かれ方についてひと通り学んだ後、「ありの行列」では、それを「読みの指標」としながら、自分たちの力で文章構成をとらえたり要点をまとめたりしていく。

単元の構想

1 単元名

読んで、かんそうをまとめよう

2 単元の目標

○文末表現や指示語・接続語、繰り返し出てくる言葉などに着目しながら文章を読み、〈はじめ〉〈中〉〈おわり〉の三部構成をとらえるとともに、文章全体におけるそれぞれの部分の役割を考えることができる。

○一つの段落には一つの事柄が書かれていることの理解をもとに、段落のなかの中心となる語や文を見つけたり段落相互の関係を考えたりしながら文章を読み、要点をまとめることができる。

○文章を読んで何に引きつけられたかをはっきりさせて、感じたことや考えたことを書くことができる。

3 指導計画(10時間扱い)

次ねらい	主な学習活動
<p>一 三部構成の説明文の書かれ方のよさをとらえることができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「イルカのねむり方」の文章構成をとらえる。 ● 「イルカのねむり方」の文章の書き方のよい所を考える。(1) ● 「ありの行列」を読み、語句調べをすることともに、感想を交流する。(1) ● 〈はじめ〉と〈おわり〉をとらえ、それぞれの役割を考える。(1) ● 〈中〉の部分を、内容を考えながら二つに分ける。(1)
<p>二 説明文を読み、文章構成をとらえたり要点をまとめたりすることができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 〈はじめ〉〈中〉〈おわり〉の小見出しをつけ、要点をまとめる。(2) ● どちらかの視点で「ありの行列」の感想文を書き、お互いに読み合う。(2) ● a ありが行列をつくる 不思議 ● b 科学者の行動や考え方を 科学者の行動や考え方を 科学的読みものを選んで 読む。(1)
<p>三 文章を読んで何に引きつけられたかをはっきりさせて、感想を書くことができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● ほかの科学的読みものを選んで 読む。(1)

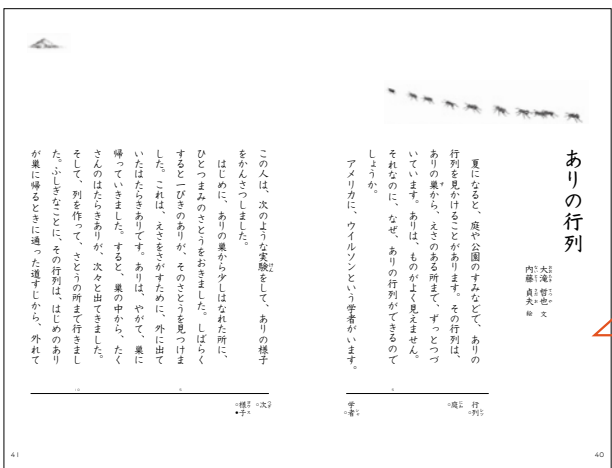
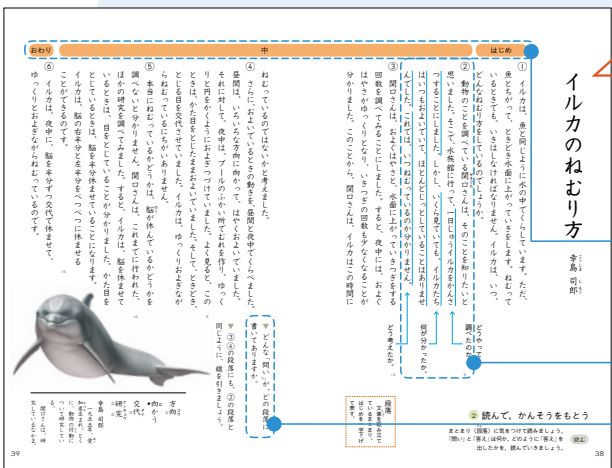
第一教材 「イルカのねむり方」

三部構成(はじめ・中・おわり)を視覚的にとらえやすいよう示している。

「実験・観察」「結果」「考察」にそれぞれ傍線を引き、3・4段落以降にも同じように線を引くよう指示を入れている。

「どんな『問い』が、どの段落に書いてありますか」と投げかけ、子どもに問いを見つけるよう促している。

第二教材 「ありの行列」



指導の実際

第2時「イルカのねむり方」

筆者の文章の書き方の
いい点を考えよう。

まず、前時にとらえた三部構成のそれぞれの部分の役割を確かめ、文末表現の違いにも注目させた。

〈はじめ〉 「問い」	〜でしようか。
〈中〉 「調べたこと」	〜を調べました。 〜が分かりました。 〜と考えました。 〜にちがいません。
〈おわり〉 「答え」	〜なのです。

さらに、文章の書き方についてどこが上手だと思うかを子どもたちに考えさせた。

- ・「問い」があるから「答え」を知りたくなって読みたくなる。
- ・筆者の予想が書いてあるから、それが当

〈はじめ〉 ①段落	②段落～⑧段落
〈中〉 ⑨段落	
〈おわり〉	

内容のまとまりを考えながら、
文章の区切りを見つけよう。

第4時では、全体を〈はじめ〉〈中〉〈おわり〉の三つに分け、「問い」と「答え」が対応していることを押さえた。

たっているかどうか気になって続きが読みたくなる。
・題名が興味を引きつける。

読み手を意識した書き方の工夫について、多数の意見が出た。さらに、ある子どもが「段落の変え方がうまい」と発言した。どの段落も「調べたこと」「分かったこと」「考えたこと」の順序で書いてあるから分かりやすいというのだ。

実験・観察→仮説→仮説の検証という科学的な論理の道筋に沿って文章が書き進められていることは「ありの行列」も同様である。第二次の「ありの行列」の読み取りにつながっていくよき気づきだった。

第4～5時「ありの行列」

A	②～④ / ⑤～⑧
B	②～⑤ / ⑥～⑧
C	②～⑥ / ⑦～⑧

第5時では、〈中〉の部分さらさらに区切るとすればどこで区切ったらいいかを考えた。まずは個々に自分の考えをもつ時間を十分に取った。その後、四人グループで意見を交換し合う。そして、全体での話し合いに移った。次のA・B・Cの3つの考えに意見が分かれ、活発な討論がなされた。

・ぼくは、Aだと思っています。④段落までは実験で「分かったこと」が書いてあるけれど、⑤段落にはウイルソンの疑問が書かれているからです。

・その疑問は観察したことから出てきた疑問なので、④段落と⑤段落はつなげた方がいいと思います。

・わたしはBだと思っています。そのわけは、⑤段落の「これら」は②段落から④段落に書いてあることを指しているからです。

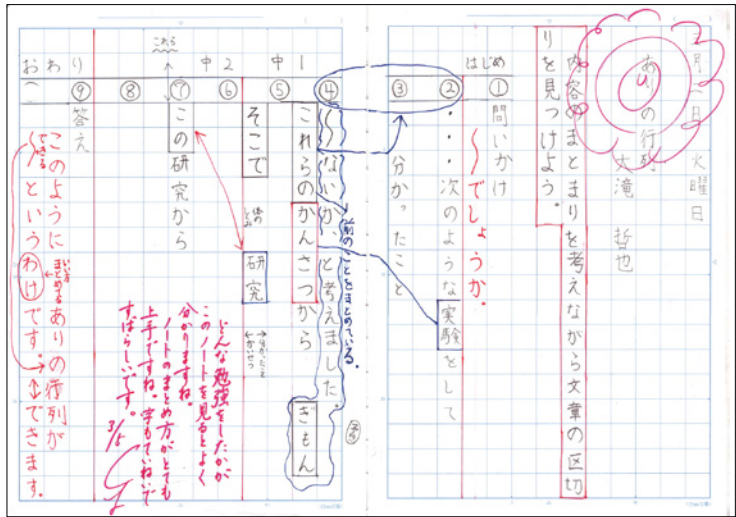
・ぼくはCだと思っています。なぜなら、⑦段落の「この研究」は⑥段落より前に書いてあること全部のこと、⑥段落まではどんな研究をしてきたかが書いて

あるけれど、⑦段落からは、ありの行列のできるわけを書いているからです。今の意見に反対です。⑦段落の「この研究」は、⑥段落の「体のしくみを細かく研究した」ことを指していると思

います。もし全部の研究を指すと思ったら、「これらの研究」という言い方になると思います。

・付け足して、⑥段落は体のしくみの「研究」で、⑤段落より前は、ありの様子の「かんさつ」なので、中身が違うと思います。

・わたしは、やっぱりBだと思います。そのわけは、⑤段落の「〜と考えました。」というのは、観察して分かったことからウイルソンが予想したことで、それを確かめるために⑥段落から別の研究をしたことが書いてあるからです。⑤段落までで区切るのがいいと思います。



児童のノート (第5時)

板書をただ写すだけでなく、自分なりの学習の足跡を残すことを大事にしてノートをまとめるように指導している。この日は、①自分の考えの根拠となる「キーワード」を抜き出す、②板書や友達の発言で大事だと思ったことを自分の言葉でメモしておく、の2点を助言して、授業の最後の5～6分間でノートをまとめさせた。

・ぼくもBに賛成です。「そこで」は、それまでの観察をもとにして新しい研究に入ったことを表しているからです。

文末表現、指示語や接続語、さらには、実験・観察→仮説→仮説の検証という論理展開のしかたなど、「イルカのねむり方」で

文章の書かれ方に目を向ける

文章の読解には、「何が」書いてあるか(内容の理解)と、「どのように」書いてあるか(表現のしかたの理解)の二つの側面がある。「何が」書かれているかを理解するには「どのように」書き進めているかに着目することが必要となる。

子どもたちは、文章構成のしかたや論理展開のしかたなど、「どのように」書かれているかを解析する話し合いを通して、「何が」書いてあるかを確かに読み取っていった。そして、「どのように」書かれているかを学んだことは、第三次で「ありの行列」の感想文を書く際の表現のしかた・方法として生かされていくこととなった。